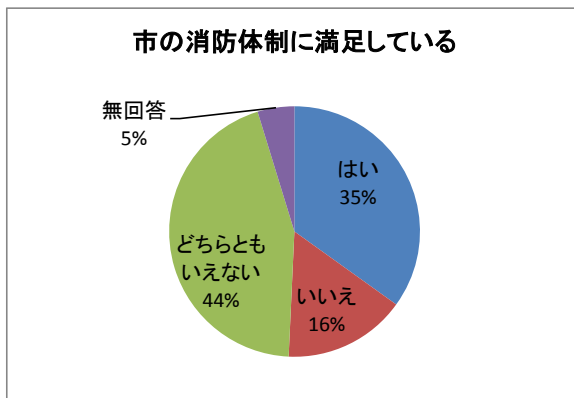
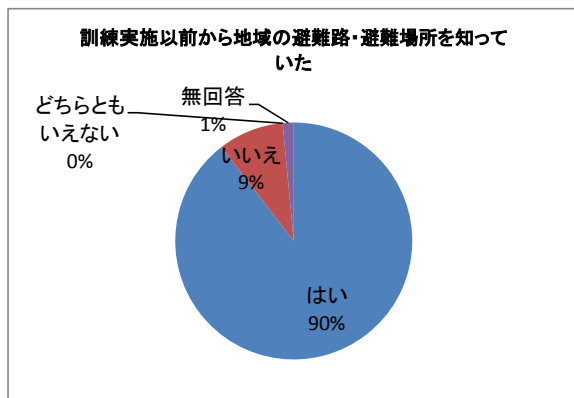


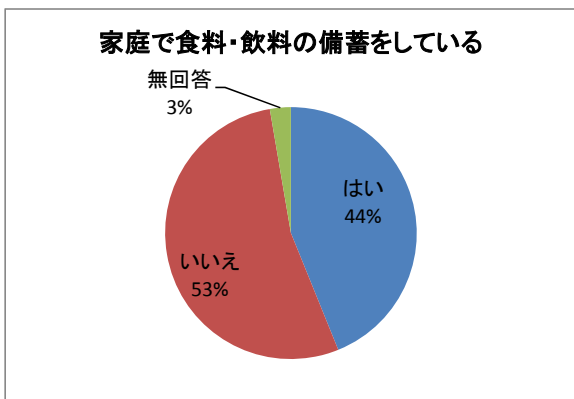
調査票の回答をいただいたうちの、参加者の居住地の内訳は、宇和島185件、吉田38件、三間11件、津島95件でした。その内、津波浸水区域内である地区は240件でした。



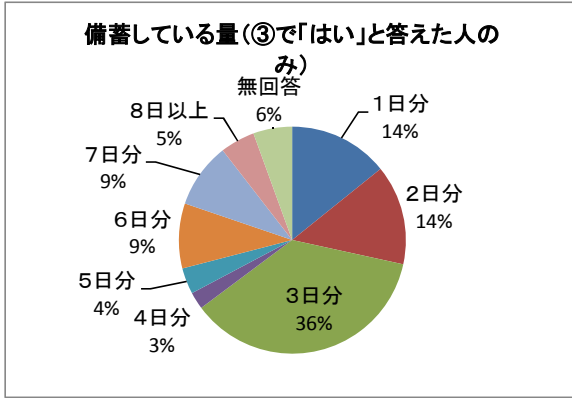
市の消防体制には35%の方に満足いただいているとの回答をいただきました。今後も体制の充実をはかっていきたいと考えています。



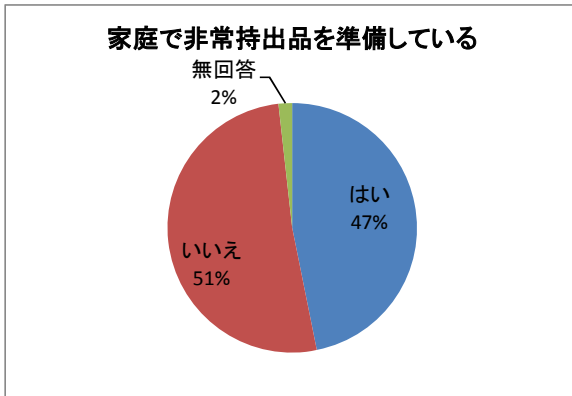
地域の避難路・避難場所について90%の方が訓練実施以前から知っていたとの回答をいただきました。避難路避難場所については、地域に浸透していることがうかがえます。



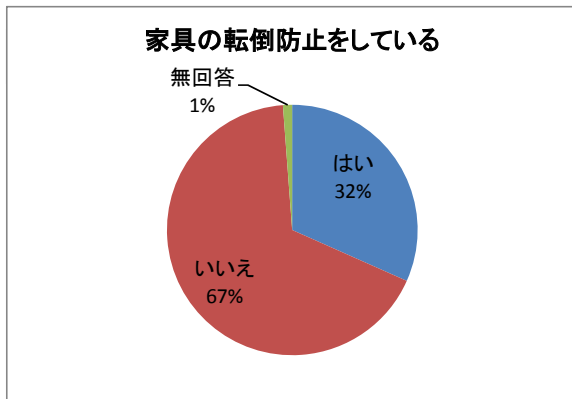
家庭での食料・飲料の備蓄については、44%の方が備蓄していると回答があった一方、53%の方は備蓄できていないとの回答でした。大規模な震災では、自助での備蓄が非常に重要となるため、備蓄率の低さが問題点として浮き彫りになりました。



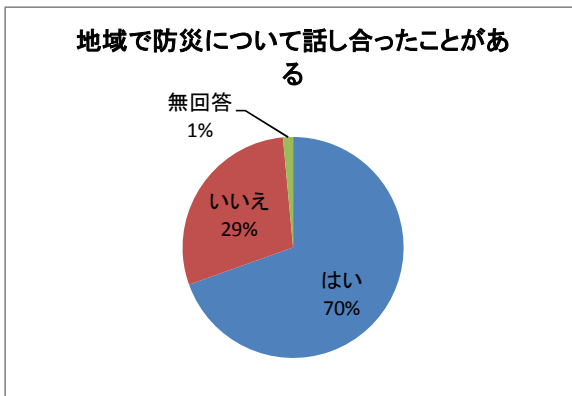
家庭で食料・飲料の備蓄をしていると回答した方の備蓄している量について最も回答が多かったのが3日分で36%次いで、1日分、2日分がそれぞれ14%でした。外部からの支援が届くまでの生活に必要なものについて、国では東日本大震災以降、7日分の家庭備蓄を推奨しており、現実との間に大きなギャップがあることがうかがえます。



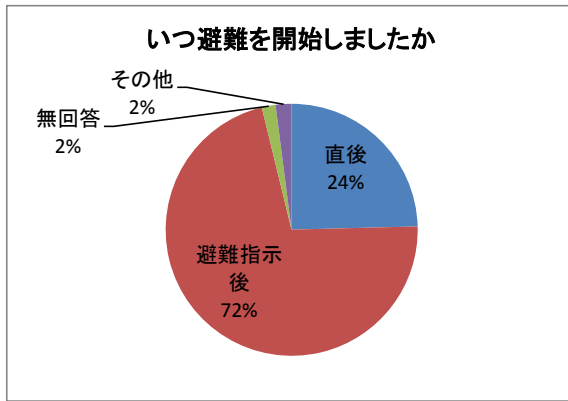
家庭での非常持ち出し品の準備については、47%の方が準備していると回答があった一方、51%の方は準備できていないとの回答でした。発災後の迅速な避難のためには、緊急的に持ち出すものを必要最小限に絞り込み、リュックなどに入れて目のつきやすいところに用意しておくことが重要です。



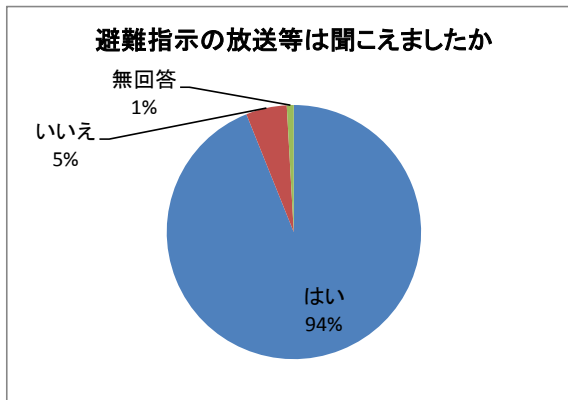
家具の転倒防止をしていると回答した人は32%にとどまり、67%の人は転倒防止ができていないと回答しました。家具転倒により負傷すること、または家具の下敷きになって、避難行動がとれなくなることも想定されるため、改善が望まれます。



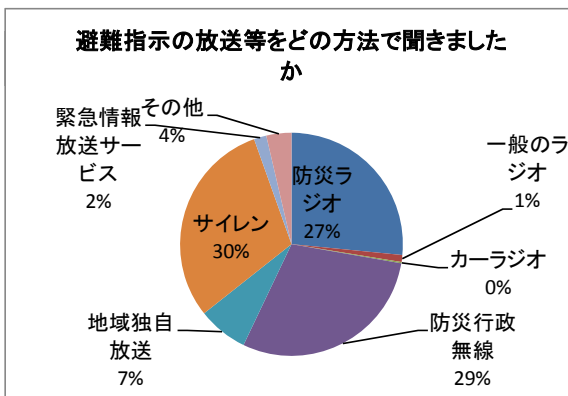
地域で防災について話し合ったことがあると回答した人は70%で、訓練の参加があった地域については防災意識が高い水準にあることがうかがえます。



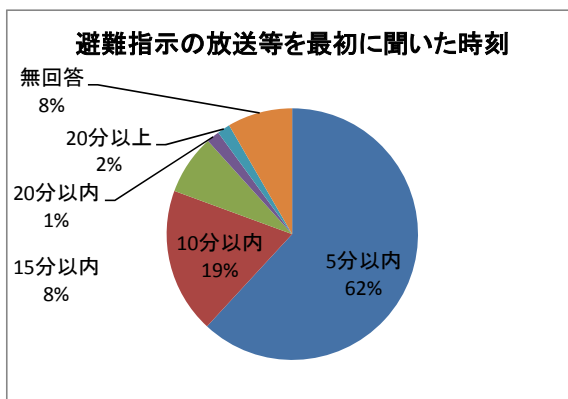
避難開始の行動をとったのは72%の方が、避難指示後と回答し、直後に避難を開始した方は24%でした。



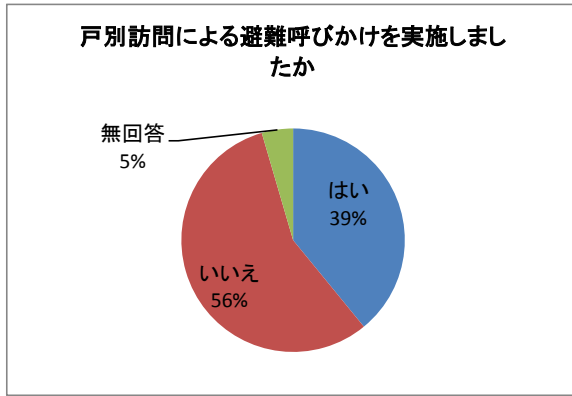
避難指示の放送については94%の方が聞こえたと回答しました。



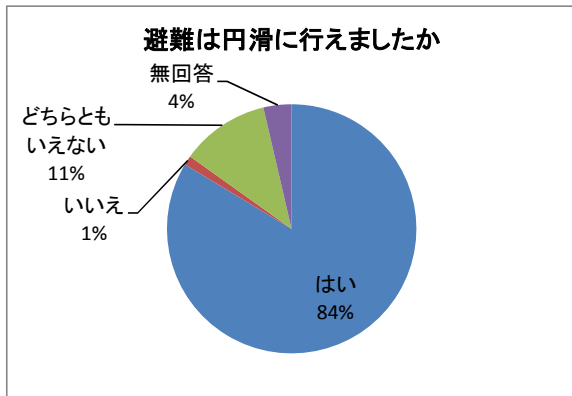
避難指示の放送確認の種別はサイレンが30%、防災行政無線が29%でした。また、宇和島市が25年度から整備を始めた防災ラジオでは27%の方が放送を確認し、今回の訓練では一定程度の成果があったことが認められます。



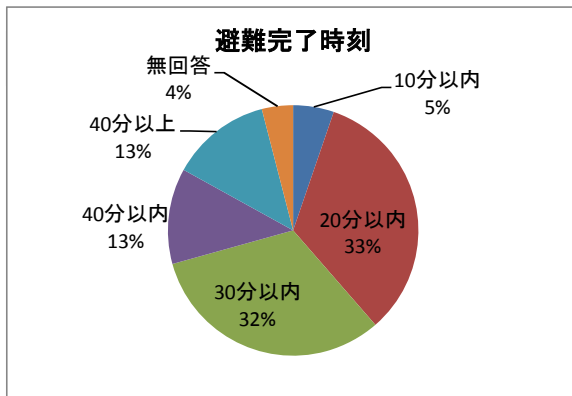
避難指示の放送を最初に確認した時刻は5分以内が最も多く、62%次いで10分以内が19%となりました。災害対策本部からの放送が、複数の手段で、なおかつ速やかに放送できたことが認められます。



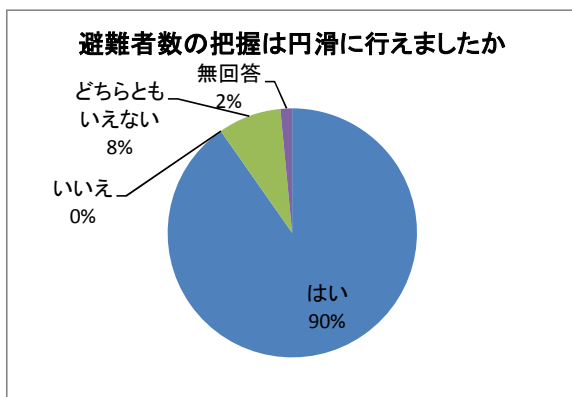
戸別訪問による避難呼びかけを実施できたか問いに「はい」と答えた方は39%で、「いいえ」と答えた方は56%でした。津波からの避難は自らの命を守り、かつ避難を意識づける率先避難が重要とされています。一方、避難経路上など、各自可能な範囲において隣近所へ避難を呼びかけることも、重要と考えられるため、より多くの方に意識付けいただきたいと考えています。



円滑な避難ができたと答えた方は84%にのぼり、訓練への参加意識の高さがうかがえます。

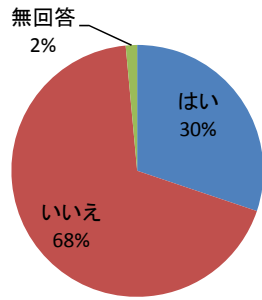


避難完了に要した時間は、20分以内が33%、30分以内が32%、40分以内が13%、40分以上要した方が13%でした。県の被害想定では、宇和島港で1mの津波が到達する時間が56分と想定されています。津波到達までの時間的猶予はわずかにありますが、迅速かつ正確な情報伝達と、早期避難を実践する住民一人一人の意識向上によって、特に40分以上要した方の避難完了の時刻を短縮しなければならぬと考えられます。



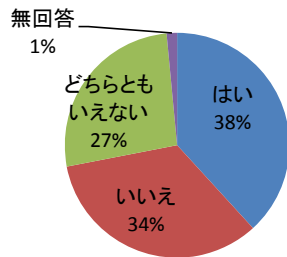
避難者数の把握は90%が円滑にいったと回答があり、自治会、自主防災組織並びに訓練参加者一人一人が協力し合って円滑に進んだことがうかがえます。

非常持出品を持って避難しましたか



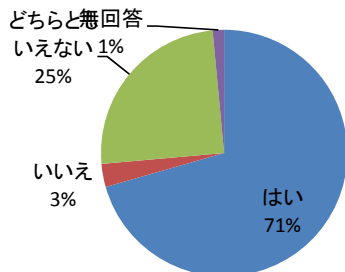
非常持ち出し品を持って避難したと答えた方は30%にとどまっています。津波の緊急一時避難場所は当面の津波災害から逃れる一時的な避難場所であり、市内に500か所以上設定されていますが、必要最低限の機能しかありません。そのため、食料や、生活物資の備蓄が整っていないが所がほとんどです。当面の命をつなぐには、各家庭において、最低限の非常持ち出し品を常に用意し、災害の時には持ち出して避難することが大切です。

自身の服装等で安全防護に注意を払い避難しましたか



自身の安全防護に関しては、注意を払った＝「はい」が38%、「いいえ」が34%、「どちらともいえない」が27%でした。安全防護という言葉自体が抽象的でなじみがないせいかもしれませんし、防護の度合いや基準でもバラツキがですが、ヘルメットや、防災ずきんなどの、防災グッズに限らず、長袖、長ズボン、足元は丈夫な靴を履くといったことも、一種の安全防護となります。この点では冬場は夏場に比べて、安全防護がはかれているともいえます。

今回の訓練は役に立ちましたか



今回の訓練が役に立ったと答えた方は71%でした。今回得られた教訓をもとに、さらなる訓練の充実を目指したいと考えています。